

第17回研究会より

参加者 6人+森田智幸（山形大学講師）先生

会場：雪の里情報館

開催の連絡が1週間前という状態ですが、今現在中学校で講師をしているNさんも加わり、研究会を行うことができました。若い人の意見や考えも出してもらいながら、すばらしい充実した時を過ごせました。

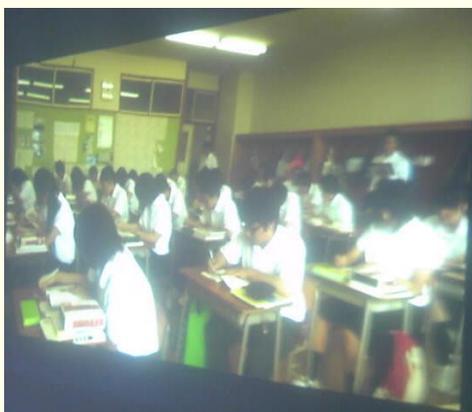
今回は、森田先生から提供していただいた、高校でI教諭がチャレンジした学び合いの授業です。

本研究会で、高校の授業を見るのは初めてです。

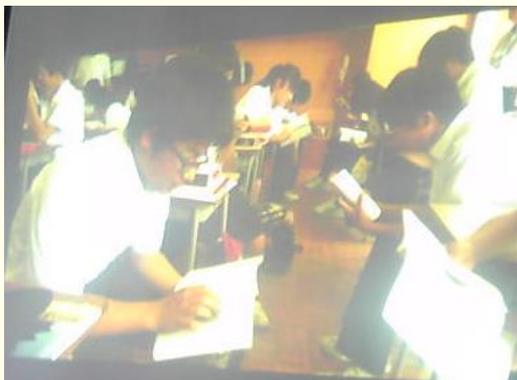
国語の漢文『画竜点睛』を①～⑦の文に分割して、それぞれをジグソー法の手法でグループになって取り組むというものでした。

I先生は、大学院で森田先生の授業を受けて、これまでの講義形式だった自分の授業を変えたいという思いを持って、現場に戻ってから取り組んだ授業ということでした。高校にも、こんな気持ちになって自分の授業改善にチャレンジしている方の話をお聞きして、とっても共感がもてました。

まずは、文を全員で声に出して読んでみます。なんだかもぐもぐとはっきりきこえないような音量です。



今度は隣とペアになって。片方が読み、片方がプリントをみて正しい読み方をチェックします。男女異性どうしのペアもとってもスムーズで、「もう一回！」なんて声が飛び出してきました。



さあ、ジグソー法による、グループでの学び合いです。それぞれのグループには、①～⑦のうちのどれかの文の解釈とその意味の課題が与えています。

・この授業スタイルを始めて数時間ということでしたが、高校生の動きは速いです。机もしっかりつけています。

・すごい勢いで学び合いが行われています。確かに1つ2つ、重い雰囲気ของกลุ่มもありますが、全員参加しています。

・途中、人の名前の箇所を人の名前とは思わないで解釈に窮するグループの様子が映し出されました。誤った解釈だからこそ、そこから共同の学びが始まっています。先生もやってきましたが、ポイントしか教えません。



ビデオの鑑賞のあと議論をしましたが、実はI先生が院生のときに、別の高校で授業をした様子も見比べることができました。

同じ国語の漢文です。

I先生が、詩のすべての意味とポイントを説明していきます。まさに講義スタイルです。ビデオでは、ほぼ7割くらいの生徒が、この授業から落ちている（寝たり、別のことをしていたり）様子が見受けられます。たぶん、どこの高校にもある典型的な教室の絵です。



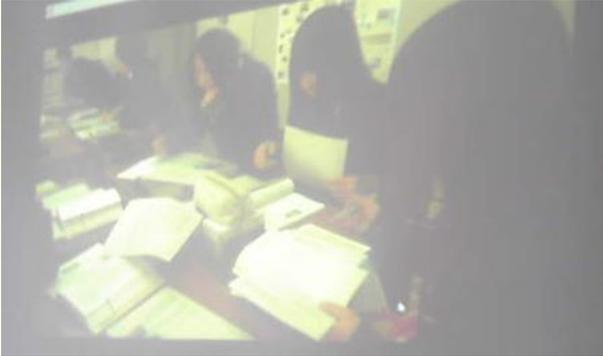
10分近く説明した後、I先生が、ジグソー法で、グループで解釈する課題を出しました。まだこのときはI先生自身が、生徒同士で難易度の高い漢文を学び合えるか半信半疑だったようです。突然の持ち込みの授業で、さらにこの学級は進学コースではなく職業コースの生徒でもあります。

しかし、驚くほど、教室の空気が一変します。

これまで、先生のながながとした説明で、ほぼ7割の生徒は落ちていたのですが、その生徒が一気に学びに戻ってくるのです。

初めてのグループでの学び合いにもかかわらず、全員が授業に参加して、検討をし始めます。さらに大切なのは、資料を行きつ戻りつする姿を生み出し、言葉を出したり、他者の考えを引き受けたりしながら、漢文の解釈を理解していく、も

しくわ、理解していない自分を認識していくすがたが発生していることです。



2つの授業を見比べて、I先生が、協同的な学びの学習に半信半疑から確信をもって自分の授業改善を行っていることに一同感銘を受けました。

何よりも、高校生がこんなに熱中して学んでいることに驚きました。

森田先生からは、協同的な学びは、高校生の方がやりやすいこと、なぜならば、課題が教科の本質をつくものが多いからで、むしろだからこそ小学校では、課題をつくるのが難しいことをお聞きしました。

以下、本研究会で参観者が学んだことを列記します。

- ・ながながとした説明のときとグループでの生徒の目の動き
- ・学習プリントにある穴埋めに縛られる生徒の思考
- ・ジグソー法のエキスパートでの学びの時間は、わかることではなく、わからないことをもってグループに変える事
- ・職業コースでの漢詩の課題に夢中になっている姿。実生活で役に立たないもの

の方が熱中しやすい。それは知性だから。小学校では、課題と生活を密着させようという意識が強い。経験+知識が近くないとダメという考えがある。真正性とはそうではない。教科書会社によっては、小学生向きに書きおろしばかり載せているものもある。本物に出会えない。子ども中心主義となると、アメリカ等では、教材と教科を結ぶ感がえが底流にあるが、日本では、子どもの学びを生活でつなごうとする考えになっている。(森田先生)

・話型について、教師が最大のモデリング。授業中「つないで」と言う教師。これは、話すこと中心の姿勢づくり。「どう思った」と言う教師。これは、聴くことを中心にした姿勢。文学の授業では、授業開始前、教師は生徒と一緒に椅子に座って本を読んで、そしてしっかりとスタートする。文学を学ぶ雰囲気在那里で形成される(森田先生)

・話すこと、聴くことの考えをもっと深く見つめなおしたい。話すことは、自分の意見を表出する行為なのだろうか。今日の授業を見て思ったのだが、話すのは、自分の考えを飲み込むためではないか、聴くというのは、むしろ、相手の考えや思いに輪郭を与えることなのではないか。だとすると、聞き手は能動的な行為、話し手は受動的な行為。そんな風に、人間のコミュニケーションを介した学びの関係は出来上がっていると強く強く感じた。

話し手、聞き手という単純なくくりでもないかもしれないが、もっともっと人が学ぶということを見つめなおさなくてはならないと思った。

第17回の研究会は、本当に感動すら覚えました。高校での授業の改革にチャレンジしているI先生。そして見事に、その変容が浮き出されている画像。何か、日々の生活で失ったものを呼び起こしてくれました。

この研究会も17回です。少ない人数ながら、熱心に参加してくれた方々に感謝

と敬意を送ります。

そして、各勤務校に戻って、ちいさく一步一步進めていって、今の本地区の現状に至っているのでしょうか。

授業を見るのと、行うのとは違います。

ただ、授業というものを、真正面からとらえることができないと、ただの口先だけの教育者になってしまうのでしょうか。

「あの子は今日元気なかったな」「さっき怒ったばかりだから」「昨日泣いていたから」授業の中では、授業者は本当に複雑に判断を余儀なくされて行っている、技です。「職人」です。職人の道は厳しいです。自分の内にある、探求心がすべてです。「これでいい」と思ったら終わりです。

この研究会が、多くの職人たちの探求心に火をつける会になるといいという思いと、これまで出会って指導してくださった多くの方々への感謝を表明する責任と行って行っている会です。

ありがとうございました。



戻る